

人間社会学部

# 試験問題冊子

(奨学生 12月19日)

## 国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の□内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の□1～□14、記述式解答欄の□A～□Jのみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

◆驚くほど忘れっぽい私たち

人は誰しも齢をとります。そして、いつかは必ず病気をわずらって医者にかかったり、あるいは、他人のお世話になって生きていかななくてはならない時期がやってきます。

しかし、こんな「自明」に思えることを、若いときや元気なときには、ついすっかり忘れてしまいます。それは驚くべき、忘れっぽさというしかありません。

たとえば、私は現在、50代という年齢ですが、自分がまさか50代になるなんて、10代や20代の頃には考えてもみなかったように思います。いや、もちろん、頭ではしっかりとわかっていたのですが、「まだずっと先のことなのだし……」と思って、ほとんどまじめには考えようとしませんでした。

さらにいうと、若さというのは、ときに傲慢<sup>1</sup>で自己中心的なものですから、つい年長者に対して、自分の若さを鼻にかけたような態度をとって辟易<sup>2</sup>させるといった経験も、振り返ると、山のようにあります。齢をとるのは齢をとった人が悪いのだ、とうっかり口に出さないまでも、そんなことを「上から目線」で思っているところさえありました。今、これを読んでいる若い人たちの中にも、おそらく私と似たところがある人はいるのではないのでしょうか。私は、ノンフィクションライターという仕事柄、取材で10代や20代の若い人たちにインタビューすることがありますが、彼や彼女らの言葉の端々から、「この人は、自分のことを永遠に若いと思っているのではなからうか……」と感ずて、クラクラめまいを覚えるようなことがたまにあります。

□a、よくしたもので、想像よりずっと速いスピードで30代はやってきますし、40代はさらにあっけなくきます。そして、「まさかこの私」が、40代どころか、50代になろうとは、もう笑うしかありません。いまだにちょっと信じがたい気がするのですが、結局のところ、人間の想像力なんて、その程度のものなのかもしれない、とわが身に照らしてそう考えたりもします。

さて、「障害」や「病気」というのも、おそらくそうしたもので、元気なうちは「まさかこの私」がと思っているところがありますが、考えるまでもなく、誰しも大病をわずらう可能性がありますし、突然の事故で思いがけない障害を負ったり、結婚・出産で生まれてきた子どもに障害があったりということもないわけではないでしょう。

また、40～50代になると、親の介護問題というのも出てきます。

親の介護問題は、切実に「私」の生活に影響をおよぼすことを考えると、それもまた私自身の問題です。とりわけ昨今では、晩婚化や出産年齢の高齢化（いわゆる晩産化）にともない、子どもが30代になる頃には、親はすでに60～70代というケースが増えていることから、親の高齢化や介護問題を「人ごと」とはいつていられなくなる時期は、どんどん早まっています。

要するに、若かったり、元気なうちには、そうしたことに深く思いがいたらないというだけで、すべては自業自得、いざというときにあわてるのは、自分が用心しなかったことの報いであるともいえます。

では、「自業自得」とか「b」などといって済ませてしまえばいいのかというと、そうではないはずです。私たちの社会は、個人や家族だけでは解決できない問題を社会全体で考え、それらを社会的に解決し、支え合うための制度を長い年月をかけて築き上げてきました。

その根本が、福祉とか、社会保障制度と呼ばれるものです。

日本では、福祉というと、つい障害者や高齢者、あるいは、生活コンキユウシヤ<sup>3</sup>といった「特別な人たち」のためだけのものと考えがちですが、本来、福祉や社会保障というのは、誰にとっても、やがてくるその日のための大切な備えであり、心がまえであるはずです。

また、将来の自分自身や家族のための大切な「保険」であり、不安の少ない安定した社会をつくっていくための有益な「社会投資」であるともいえます。そうした制度のありがたさを、ここでもう一度、冷静に認識しなおしてみるのが大切だと思うのです。

(中略)

しかし、障害者について考えることは、じつは健常者について考えることであり、同時に、自分自身について考えることでもあります。とりわけ、重度の障害がありながらも、地域で自立した生活をおくっている人たちの試みをたどることは、普段は見過ごしている自分と他人との関わりだとか、人と社会との関わり、あるいは、そもそも人が生きるとはどういうことなのかを考えていく上で、とても学ぶべきことが多いのです。そして、障害のある人たちが生きやすい社会をつくっていくことは、結局のところ誰のトクになるのか、という素朴な視点で、福祉という発想を根本から問い直してみたいと思つていきます。

(中略)

◆なぜ障害者と会うと緊張するの？

私は、今では多くの障害のある人たちと友人づき合いをし、中にはズケズケとものいい合える人も少なくありませんが、振り返ると、私は鹿野さんと出会うまで、障害者とまともにつき合った経験がありませんでした。

それまで、私の家族や身近な人の中に、目立った障害のある人はいませんでしたし、小学校や中学校時代は同じクラスに障害児がいましたが、さほど親しい関係になつた記憶もありません。逆に、彼らをいじめたり、差別したりするようなこともしなかったのですが、どちらかというところ、「近からず遠からず」という感じで、ブナン<sup>4</sup>に接していたからでしょうか、とくに記憶に残るような体験もありません。

ですから、最初に取材で鹿野さんに向かい合ったときには、正直、何を話せばいいのか、妙にドギマギしたものでした。

まず本人を前にして、病気や障害のことをはっきり口にしていいものなのかどうか、非常にとまどいましたし、結局のところ、「いい天気ですね」とか、「調子はどうですか」などと、ただ当たり障りのない会話を終始した、というのが、私と鹿野さんの最初のコミュニケーションでした。頭の中では「普通に接しよう」と思いながら、全然「普通」

ではありませんでした。

なぜ健常者は障害者に会うと、つい、とまどいや緊張を感じてしまうのでしょうか。もちろん人によって、あるいは、経験の多い少ないによっても違います。障害者に差別的な感情をあらわにするような人は別にして、今日では、逆に多くの人が、「差別はよくない」とか、「障害者は不幸ではない」とか、あるいは、「障害者も健常者も同じ人間だ」などという理念にしばられて緊張してしまうからではないでしょうか。

また、誰しもやさしい自分を演じたいところがありますから、いらぬ「思いやり」や「おせっかい」を過剰に発揮してしまって気まずい思いをしたり、逆に、不用意な発言をして、「障害者差別だ！」などと思われたりするのも面倒ですから、そんなあれやこれやを考えると、関与らないに越したことはない、とつい考えがちでもあります。

なにも障害者に限らず、初対面の人どうしは、お互いの位置や距離感を探り合うものですが、「障害者」という社会的記号を意識してしまう分、つき合い方の「c」を高くし、ややこしくしてしまう側面があります。つまり、「普通に接する」とは、心がけだけではどうにもならないということです。

では、経験を積み重ねればいいのかというと、話はそう単純でもありません。

私は、取材で多くの福祉関係者や医療関係者と話をすることがありますが、障害や病気についてよく知っていて、接する機会も格段に多いはずの彼らが、外部の目からすると、案外、大切なことを知らなかったり、気づいていなかったり、あるいは、意外な思い込みや偏見に凝り固まっているのではないかと思えてならないこともあり、「それは違うのではないか」と感じてしまう場面が往々にしてあるからです。

とりわけ、2016年（平成28年）に神奈川県相模原市の障害者施設で、衝撃的な殺傷事件が発生しました。（中略）事件を起こした犯人は、その施設に3年以上も勤務していた元職員であり、学生時代には障害者支援のボランティアをした経験まであったといわれていますから、この事実を見過ごしにするわけにはいきません。

先ほど、心がけだけではどうにもならないといいましたが、結局、経験だけでもどうにもならない面が確実にあるということです。

経験すればするほど、おかしな偏見や妄想をふくらませたり、同じ事実をまったく別方向にキョツカイ<sup>5</sup>する人もいることになるわけですから、それを思うと、何をどう伝えても意味がないのではないかと、つい無気力になってしまいがちです。

しかし、だからこそ、「経験しつつ考える」という行為を通して、思考や態度、関係性のバランスを保っていくことが大切なのだと思います。

（渡辺一史 『なぜ人と人は支え合うのか―「障害」から考える』）

問1 傍線部1、2の漢字のよみをひらがなで、傍線部3、4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1  A      2  B      3  C      4  D      5  E

問2 傍線部アのタイトル「驚くほど忘れっぽい私たち」の「忘れっぽい」とは、何を忘れてしまうのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

1

- ① 若さというものは、ときに傲慢で自己中心的なものであること
- ② 福祉というものは、生活コンキウシヤのためだけにあること
- ③ 個人や家族だけでは解決できない問題を社会全体で考えてきたこと
- ④ だれもが歳をとり、いつかは病気になって他人の世話になったりすること

問3 空欄  a に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

2

- ① なぜなら      ② だから      ③ しかし      ④ たとえば

問4 空欄  b に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

3

- ① 自己責任      ② 自暴自棄
- ③ 他力本願      ④ 自縄自縛

問5 傍線部イ「なぜ障害者と会うと緊張するの？」に対する筆者の答えとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

- ① 障害者と接する経験が少ないから。
- ② 障害者と接する経験が多すぎるから。
- ③ 障害者という「社会的記号」を意識し、ややこしく考えてしまうから。
- ④ 障害者という「社会的記号」を意識し、逆に、不用意な発言をしてしまうから。

問6 傍線部イのタイトル「なぜ障害者と会うと緊張するの？」を踏まえて、筆者がなすべきことと考えているものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

- ① 障害者に直接関わるのではなく、手厚い福祉や社会保障制度にまかせること
- ② 障害者差別をしないように、できるだけ障害者には関わらないようにすること
- ③ 障害者と接する経験を増やしつつ、「思いやり」を発揮すること
- ④ 障害者と接する経験を増やしつつ、障害者に関するさまざまな理念について考えること

問7 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 敷居
- ② 鴨居
- ③ 寄居
- ④ 仲居

問8 傍線部ウ「この事実」として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 福祉関係者や医療関係者にも障害者に偏見を抱いていることがあること
- ② 福祉関係者や医療関係者の方が障害に対する知識が不足していること
- ③ 相模原市の障害者施設における障害者殺傷事件の犯人は福祉関係者であったこと
- ④ 相模原市の障害者施設における障害者殺傷事件の犯人は障害者支援ボランティアの経験があったこと

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

今日は「文学史の語り方」というテーマでお話をさせていただきたいと思います。皆さんの中には、なぜ「文学史の方法」ではなくて、「語り方」なのか、そう疑問に思われた方もいらっしゃるかもしれません。ただ私としては、すでに出来上がっている「方法」を紹介するのではなく、むしろ物語と歴史との関係がかつてどのように論じられていたか。それを明らかにすることで、現在の「文学史」を考える糸口としたい。そう考えて「語り方」とさせていただきました。

その手がかりを、まず明治前期の代表的な知識人の一人、田口卯吉が書いた『日本開化小史』（丸屋善七他・一八七七年九月～一八八二年一〇月）の中に求めてみましょう。現在、この著作は日本で最初に書かれた近代的な歴史書と評価され、様々な創見に満ちた文学史を含んでいる。その意味でも極めて注目すべき著作なのですが、その中で田口卯吉はこのように興味深いことを言っていました。

つまり日本に漢字が伝わって以来、大和朝廷は『日本書紀』をはじめ、『続日本紀』など、「史」と呼ばれる編年体 (chronological order) の記録をたくさん残したが、しかしそれは朝廷が執り行なう祭祀や、不思議な自然現象や、不吉なゼンチヨウ<sup>2</sup>と思われる事件などを、ただ雑然と列挙しているだけで、一定の基準によってシユシヤセンタク<sup>3</sup>が行われたとは思えない。言葉を換えれば、後の歴史家が歴史を書く際には、ある事件と別な事件との因果関係に注意を払うものだが、そういうことには全く関心がなかった。田口卯吉はそのようなことを指摘し、「唯々<sup>ただただ</sup>面前に顕はれたる事件を其俛<sup>そのまへ</sup>に記載するに止まるのみ、而して其如何なる事情よりして起りし乎に至りてハ著者全く関係なきが如し」と言い切っていました。

そうしますと、田口卯吉が考える歴史は、事件と事件との関連を見出す能力なしには生れ得ないことになるわけです。彼の見るところ、その能力を養い、育てたのは、『竹取物語』（九世紀後半から一〇世紀初め頃）や『伊勢物語』（成立年代未詳）などの物語でした。

もちろん物語内容や構成は、この世にあり得ない荒唐無稽な出来事であったり、一人の貴族の生と死という大きな枠組みの中に興味深い挿話を配列しただけであったり、必ずしも現実の事件に目を向けさせるようなものではありません。しかしそうは言っても、とにかくこれらの物語に、事件と事件の関連を語り、一つのストーリー・ライン (story line) を辿つてゆく発想が現われてきた。田口卯吉はその点を重視して、それらが発達してやがて『源氏物語』（一一世紀前半）という大きな構想の物語を生み、更にその構想を借りる形で、『栄華物語』（正編は一一世紀前半、後編は一〇九二年の後間もなく完成）という歴史書が書かれた、と論じていました。

『栄華物語』は宇多天皇の代（八八七～八九七）から堀河天皇の代（一〇八六～一一〇七）までのおよそ二〇〇年間、朝廷を中心とする貴族社会に起った事件を語った物語です。各章のタイトルは「月の宴」「夕霧」「雲井」など、従来の物語の章立てに近く、内容もまた帝の遊宴や、大臣の栄華、妃の入内などが中心で、田口卯吉の言葉を借りれば、「其間に和歌を交へ、女々しき状態を写せしものなり、されば其意を注ぎし所、決して国家有要の事件と称すべからず」という性質のものでした。ですから、現在の歴史学者や文

学研究者はこれを「歴史物語」と呼んで、「a」に分類し、「b」とは見なしていません。

ところが田口卯吉はそういう特徴を認めつつも、「之れを何事も差別なく混合して記載したる六国史（『日本書紀』から『三代実録』に至る六種の「史」）等の錯雑なるに比すれば稍々<sup>ヤ</sup>選択の智を存すと云ふべし」という観点によって、これを歴史書と評価した。しかも日本で初めて書かれた歴史書と評価したわけだ。

このように田口卯吉は、物語の構想力なしに歴史記述は生れ得なかったという、いわば物語先行説を唱えたわけですが、その著書のタイトルに「開化」(civilization)という言葉を使い、いま引用した文章では「選択の智」という言い方をしていました。そのことから分かるように、彼は開化史観の持ち主でした。ただし〈開化史観〉というのは私が作った用語であって、なぜそういう用語を作ったかと言いますと、明治の前期、ヨーロッパから発展段階論的な進化史観が入って来て、大きな影響を与えたからです。福沢諭吉（『世界国尽』一八六九年）や内田正雄（『輿地誌略』一八七〇〜一八七七年）などの知識人がそれを受け継いで、〈人類の文明は野蛮 (savage) から未開 (semi-barbarous)、未開から半開 (half-civilized) を経て c (civilized) へと進んでゆく〉という考え方を説いていました。

ですから、この点から田口卯吉の著書の特徴を見るならば、彼はこの進化論をベースに、日本が開化に向うストーリー・ラインを作り、そのラインに即して事件をシユシヤ<sup>3</sup>センタクして、原因と結果の連鎖に配列していった。そして今、そのやり方を「歴史の記述」それ自体の歴史に当てはめるならば、『六国史』はまだ「選択なき、雑然たる列举」の未開状態であり、『栄華物語』に至って漸く<sup>5</sup>「選択の智」が現われ、半開へ進む萌しを見せていたことになるでしょう。それに対して、文明開化の段階に達した歴史記述とは、彼自身の『日本開化小史』のように、〈人間の「智」を開き、文明を進めてゆく原理 (principles) があるとするれば、それは何か〉という問いに答えることができる、一定の説明原理を用意し、それに拠って開化の諸相を描くことだったわけです。

（亀井秀雄 『主体と文体の歴史』）

問1 傍線部1、4、5の漢字のよみをひらがなで、傍線部2、3のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答用紙に記入しなさい。

1  2  3  4  5

問2 傍線ア「語り方」とあるが、筆者が「文学史の方法」ではなく、「語り方」とした理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① すでに現在出来上がっている「文学史」を紹介するのに「語り方」とした方がしっくりくるから。

② 物語と歴史との関係がかつてどのように論じられていたかを明らかにすることで現在の「文学史」を考える糸口としたいから。

③ 文学史もまた歴史学の一分野であると考えたと、歴史的事実の記録を重視するべきだから。

④ 「文学史」は事件の因果関係を物語のように語ることが重要だから。

問3 傍線イ「創見」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 想像力

② 創造的な物

③ 従来にない新しい見解

④ 多様な見方

問4 傍線部ウ「田口卯吉が考える歴史」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① 『日本書紀』や『続日本紀』のように編年体の記録がたくさん残されているもの

② 事件と事件との関連を見出す能力を養った『竹取物語』や『伊勢物語』のこと

③ 事件と事件との関連を語り、一つのストーリー・ラインを辿っていく発想のある『栄華物語』のようなもの

④ 『源氏物語』のような大きな構想のもの

問5 空欄  と  に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

① a 歴史書 b 文学

② a 文学 b 物語

③ a 物語 b 歴史書

④ a 物語 b 文学

問6 空欄 c に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① 全開
- ② 市民化
- ③ 文明開化
- ④ 進化

問7 筆者が田口卯吉の『日本開化小史』を開化史観に基づく歴史書と考える理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① 文明を進めていく原理は何かを問うているから。
- ② 「選択の智」が現れ、半開へ進む萌しを見せていたから。
- ③ 田口卯吉は、明治前期の代表的な歴史家だから。
- ④ 文明を進めてゆく一定の説明原理に基づき、それによって開化の諸相を描いているから。

問8 筆者が現在の文学史を考える糸口として田口卯吉の『日本開化小史』を紹介している理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 『日本開化小史』は、明治初期に特徴的な「進化史観」をベースに「物語と歴史との関係」を論じている。その手法が現在の文学史を考える手掛かりとなるから。
- ② 文学史は、『日本開化小史』のように進化論をベースにして記述することが重要である。と筆者が考えているから。
- ③ 『日本開化小史』は「文明を進めていく原理がある」とすれば、それは何か」という問いに答えているから。
- ④ 文学史を考える上で見逃せない「物語と歴史との関係」を『日本開化小史』が明らかにしており、現在の文学史も見習うべきであると筆者が考えているから。

(以上)



